むくげ通信 307 号 2021．7．25

韓国で歌手を蔑視した言葉「タンタラ」について（中）

山根 俊郎

先号では、

先号では、韓国で歌手を蔑視した言葉「タンタラ」（딴따라）の語源について考えました。

タンタラ（딴따라）の最初のタン（딴）は、ラッパの音（擬声語）であり、後ろのタラ（따라）は、タラジ（따라지）の略字だというのです。

今回は、タラジ（따라지）について述べます。

タラジ（따라지）の語源の研究

韓国のあるサイトでタラジ（따라지）の語源について言語学的に詳しく説明した論文がありましたので引用します。

国語語源「３８タラジの語源」（‘삼팔따라지’의 어원）洪允杓（ホン・ユンピョ）延世大学校教授

（2005 年 12 月～2007 年 9 月国語審議会 全体副委員長）

出典：月刊『新国語消息（새국어소식）』通巻 2005 年 11 月第 88 号 非売品 発行国立国語院。（論文は、ゴジック体で表記します。

洪允杓教授　　見出しは山根が入れました）

３８タラジ（삼팔따라지）という単語は、国立国語院で編纂された『標準国語大辞典（표준국어대사전）』(2001 年)、ハングル学会の『ウリマル大辞典（우리말큰사전）』(1991 年)、金星社版（금성사판）『国語大辞典（국어대사전）』(1991 年）などすべてに載っている。

この単語を最初に載せた辞典は、李熙昇（イ・ヒスン）が編纂した『国語大辞典（국어대사전）』(1961 年)である。

この辞典には ‘３８タラジ（삼팔따라지）’を２種類に解釈している。

１つは、‘賭博場（노름판）で，３点（세 끗）と８点（여덟　끗）を足して、できた１点（한 끗）を指す言葉’である。

もう１つは、俗語で ‘3·8 線以北の北韓（ママ）から越南した人を呼ぶ言葉’と解釈している。この解釈は、他の辞典にもそのまま適用されていて、ほとんど類似の意味として解釈されている。

タラジ（따라지）とは？

そうであるならば、３８タラジ（삼팔따라지）の ‘タラジ（따라지）’は、何なのか?

この‘タラジ（따라지）’が最初に登場した辞典は、朝鮮総督府で刊行された『朝鮮語辞典（조선어사전）』(1920 年)である。

「‘タラジ（□라지）注１’は、矮小な人のことである」と解釈している。

注１：原文で따라지の따の字が・に化けている。

同じ意味を持つ言葉として‘侏儒（チュユ・주유）注２’と ‘憔僥（チョヨ・초요）’と ‘ナンジャンイ（난장이）注３’を挙げている。

３つの単語は全て同じ意味であり、背が低い人を指している。

注２：侏儒とは体の小さい人、知識のない人の蔑称。『山海経』の大荒南経には焦僥、憔僥（しょうぎょう）、海外南経には周饒（しゅうじょう）と呼ばれる小人が住んでいると記されている。『山海経 中国古代の神話世界』 高馬三良訳 平凡社ライブラリー 1994 年、158 頁）

注３：‘ナンジャンイ（난장이）’は、固有語である。『韓日辞典』（NAVER 電子辞書）では「小人」とある。

文世榮（ムン・セヨン）の 『朝鮮語辞典（조선어사전)』(1938 年）（朝鮮語辞典刊行会 出版)にも‘タラジ（따라지)’を ‘背が低い人の別名’であると解釈している。

朝鮮語学会（조선어학회）の『大辞典（큰사전)』(1957 年)には ‘背と体が小さい人を呼ぶ’以外に‘賭博場（놀음판）で１点（한 끗）の呼び方’という解釈も付け加えた。

そのため‘タラジ（따라지)’は‘背が低い人’から‘賭博場で１点（한 끗)’という意味が付加されたのである。

『標準国語大辞典（표준국어대사전)』(2001 年)の‘タラジ（따라지)’の解釈を見れば ①‘賭博場でのサムパルタラジ（삼팔따라지)’をまず載せて、 続いて②‘38 線以北から越南した人を指すサムパルタラジ（삼팔따라지）を載せた後、 最後に③‘しがない（보잘것없거나)、取るに足らない

（하찮은）境遇に置かれた人（처지에 놓인 사람）や品物を 俗っぽく言う言葉’を載せている。

北韓の『朝鮮語大辞典（조선말대사전）』（1992年）には、‘多くの人の中で背も低く、体躯も小さく風采もパッとしない姿の人やつまらない品物を低めて言う言葉’という意味と‘賭博場で１点（한 끗）を呼ぶ言葉’という意味を載せている。

これらの辞典を歴史的に検討して見れば‘タラジ（따라지）’は、最初は‘背が小さい人’から出発して‘賭博場で１点（한 끗）を呼ぶ言葉’になり、そして‘38線以北から越南した人を指す言葉’に拡大されて行ったことが分かる。

そして、その使い方も最初の意味であった‘背が小さい人’という‘タラジ（따라지）’の意味は、次第に消えて行ったことも発見できた。

タラジ（따라지）’の元々の意味

そうであるならば、タラジ（따라지）’の元々の意味は何だったのだろうか？

タラジ（따라지）’が最初に登場する文献は、意外にも漢字字解文献である。

鰍　漢字 の‘鰍’（チュ・추）を国語に当てて読む訓読み（새김）に‘따라지’が登場する。

1905年に刊行された『字典尺牘 完編（자전척독 완편）』という本には、‘鰍’を‘めだかーチュ（송사리 추），雑小魚ーチュ（따라지 추），小人鰍生’という解釈をしている。

次に、韓国の漢字辞典（NAVER 電子辞書）では、この漢字は、次の通りです。

송사리 추　（ソンサリ　チュ）魚(물고기어)　総画数19画。송사리（メダカ）、2．돌잉어（ニゴイ・鯉）、3.따라지（タラジ）：しがない（보잘것없거나）、取るに足らない（하찮은）境遇に置かれた人（처지에 놓인 사람）や品物を 俗っぽく言う言葉。

日本の漢字辞典で調べると、部首魚 魚（うお・うおへん・さかなへん）画数１９画。読み：シュ、ソウ、意味：ざこ。こざかな。小さい魚。つまらないもの。とるに足らないもの、と記述がある。

ここで‘따라지’が‘雑小魚（잡소어）’、即ち‘小さな 雑魚（작은 잡고기）’を意味して、‘小人（소인）’を‘鰍生（추생）’、即ち‘メダカ（송사리）のような小さな魚の生まれ（胎生 태생）’だと言ったのが、人を指して‘따라지’と言うようになったことが分かる。

よって、‘따라지’の元来の意味は‘メダカのような小さな魚’であったが、これが‘小人（소인）’を意味するものに意味が転移した。

小さなものや取るに足らないものという意味を含めて、ろくでもないしがない人（변변하지 못한 하찮은 사람）を‘따라지’と呼んだのである。

このように‘추’（鰍）の訓読み（새김）で‘タラジ（따라지）’を書いたことが現代の漢字辞典にもそのまま引き継がれている。1908年に池錫泳（チ・ソクヨン）が書いた『字典釋要（자전석요）』、1921年に刊行された『漢鮮文 新玉篇（한선문 신옥편）』、1927年に刊行された『增補 註解 新玉篇（증보 주해 신옥편）』にも載せられている。

1987年度に刊行された張三植（チャン・サムシク）編『大漢韓辭典（대한한사전）』には、‘鰍’を‘メダカ（ソンサリ・송사리）の鰍（チュ・추）、小人（소인）の鰍（チュ・추）、タラジ（따라지）の鰍（チュ・추）、と書かれている。

タラジ（따라지）’の例文・小説

‘따라지’の例文が初めて出てきた文献は、新小説である。李海朝（イ・ヘジョ）が書いた新小説「花世界（화세계）」。『毎日申報』に1910年10月ー1911年１月まで73回連載された。

内容は、奇遇な男女の出会いと別れである。金持ちの家の美貌のひとり娘 金守貞（キム・スジョン）が運命に翻弄される話。

「ク・チョンイ（구정위）参領注４のせいで私がことわざ（俗談）にある‘タラジの命（따라지 목숨）’になり、この席で許諾を得られずに何の結論も出せなかったら大きな□□や □□のように高笑いをしながら、ほほほほ」

注４：参領（チャムリョン・참령）は、大韓帝国時代の将校階級の一つ。副領の下で大隊長級。1907年に軍隊が解散させられる。

‘タラジの命’が‘価値もなく望みもないしがない命’という意味で使われている。

ことわざ（俗談・속담）にある‘タラジの命（따라지 목숨）’になった、と言う表現に見られるように‘タラジの命’という言葉がその当時に

は、広く使われていたことを証明できる。

この意味で書かれたものが 1937 年に金裕貞（キム・ユジョン）が書いた短編小説『タラジ（따라지）』である。（次号で紹介する予定）

これに関連して賭博場で １の点数（ホルクッ・홀끗）であるタラジ（따라지）を掴んだ不幸な身の上（身世）という意味で‘タラジ身世（따라지 신세）’という言葉が生まれた。

この言葉は‘タラジの命（따라지 목숨）’と‘タラジの人生（따라지 인생）などと共に使われた。

‘タラジ（따라지）’の分析

では‘タラジ（따라지）’は、どのように分析されるのか？

‘タラジ（따라지）’が小さなものを意味するので‘タル（딸） ＋ アジ（아지）’に分析できる。

‘アジ（아지）’は ‘子犬（カンアジ・강아지），子牛（ソンアジ・송아지），仔馬（マンアジ・망아지）’などの ‘アジ（아지）’のように小さなものを表すのである。

それならば‘タル（딸）’は、何であろうか？

タラジ（따라지）と同じ意味を持つ単語にタルボ（딸보）： 1. 度量の狭い人、2. ずんぐりした人、がある。

これと関連するタンタルボ（땅딸보）：ちんちくりん、 ずんぐりした人、 身の丈の低い人。

タンタリ（땅딸이）：ちんちくりん。背が低く、体格ががっしりした人をあざけていう語。などがある。

この タル（딸）が タル（딸）＋ アジ（아지）の タル（딸）と同じものと考えられる。

タンタルハダ（땅딸하다）：ずんぐりする。背が低くて太っている。

タンタルマカダ（땅딸막하다）：ずんぐりしている、ずんぐりむっくりしている。などの形容詞もあるが、この時の タン（땅）と タル（딸）は、分離されることがありえるのである。

何故ならばタン（땅）は横にベタッとずんぐりしている（옆으로 딱 바라진 것）ことを意味する。

タル（딸）は、背が小さいもの（키가 작은 것）を意味して、タンタル（땅딸）は、体が横にベタッとずんぐりしていて、背が小さい人（몸이 옆으로 딱 바라지고 키가 작은 사람）を言うからである。

‘タラジ（따라지）’の展開

結局、タラジ（따라지）は、タル（딸） ＋ アジ（아지）で構成された単語であり、メダカ（ソンサリ・송사리）のような小さな魚を意味したが、人を比喩して、しがない（보잘것없는）、取るに足らない（하찮은）人を意味するようになった。

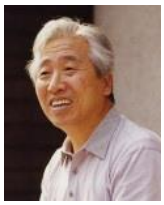
それが賭博場でもっとも小さな点数（クッス・끗수）である１点（ハンクッ・한끗）を象徴的に表現するタラジ（따라지）となり、 それで‘タラジ（따라지）を掴んだ’という表現は、即ち‘１点（ハンクッ・한 끗）’を掴んだ身の上（身世）という意味になった。

ところで２枚を合計して１点（한 끗）になるのは‘2+9, 3+8, 4+7, 5+6’の４種類があるが、その内でもっとも悪いものが‘3+8’なので、‘３８タラジ（삼팔따라지）’という表現が登場するようになったのである。

逆説的にこれが今日の‘サムパルクァンテン・３８光テン・삼팔광땡’ 注５という強い点数ができた根拠になった。

注５：韓国の花札には「光」（クァン・광）が書かれた札がある。その札で作った３月（桜）と８月（公山）の光が付いた札はテン（땡）と同じぐらい強い点数になった。３８光テン→‘３８タラジ（삼팔따라지）’は、もっとも良くない点数（끗수）である。ところでこれが 突飛に‘３８線（삼팔선）’に比喩されたのである。それで‘３８タラジ（삼팔따라지）’が‘３８線を越えて越南した人々を指す俗語’として登場したのである。

「私もお前と同じ３８タラジ（삼팔따라지）だ。私は解放された翌年に平安南道 鎮南浦から越南した」洪盛原注６著『ユギオ（육이오）』(月刊世代 1970 年９月号-1975 年５年間連載)の一節である。



注６：小説家洪盛原（ホン・ソンウォン 1937-2008）はタラジ（따라지）という言葉を好んだようです。前号で紹介した『タラジ散調（サンジョ）・따라지산조』は 1973 年『東亜日報』に連載された洪盛原が書いた小説名です。

＊次号：金裕貞の小説「タラジ/惨めな生活」等（続）